

‘ο κόσμος, αλλοίωσις’ ο βίος, υπόληψις.’

74号 1993.9.6

文・編集・発行

恋 怪子

BAND: マンガンズ

PHOTO BY K.K.



7月19日、マンガンズは巨大な姿をあらわしはじめた。ベースとドラムが新しいメンバーになってライブハウスでやるはじめてのライブが7月13日にシエラであって、そのときは11つかきとすこい絵になる絵のスケッチを見ているようだった。新しいメンバーがマンガンズでそれぞれ自分たちを發揮、表現するようになるには、もう少し時間がかかると思われた。

しかし、その6日後の19日に巨大な姿をあらわしはじめたということは、メンバーの一体化が急速に、急激に進んでいるということなのだろう。その一体化の勢いが毎週の夜の路上ライブになっているのかもしれない。7月10日に新宿駅東口の路上ではじめてやって以来、7月31日、8月7日、8月13日、8月21日と警察官に止められるまでは新宿の路上で、そして8月28日、29日と連夜原宿代々木公園わきの路上で、と路上ライブをつづけている。

どこでやっても、まいている人が多くても少なくても、警察官がいつ止めに来るかどうかわからなくても、全力を尽くしてライブをやる。

ボイラズ(3年前まで、ヴォーカルとギターの人がやって、いたバンド)のときや、今のメンバーになる前のマンガンズのときは、ヴォーカルと他のメンバーが横一線にならんでいる感じだったのだが、いまのマンガンズは、ギターが大きな柱になってヴォーカルを生かすためにトリカこんでいる。4人のメンバーの他にハーモニカやピアノやギターが入ることになって、それはわからない。8月8日にアピヤでやったときは、ピアノとハーモニカが入っての6人編成。このときやった「ママ」という曲はハーモニカではじまったのだが、歌の世界を主導していくようなやさしい音色にはじうたれた。

マンガンズは演奏は強烈だし、ヴォーカルも以前よりずうっと華やかなのだけれど、とてもまきやすく解放感があるから、まいていてつらくならない。それは歌詞からもうかがえることで、「パンチドラッカー」のなかの「負け犬なんかにはなりたかないだろベイビー」だけど勝たなきゃならぬものはない」というところが「スロウ・アンド・スロウ」のなかの「すべてをゆるせるときがある」というところにそれを強く感じる。

パンチ ドランカー

サンドバッグになっちゃったぜ
生まれた町を出たのは
チャンピオンになるためだけ
うなだれた親父みたくにや
なりたかなかった

スポットライトが
まぶしすぎるぜ
おいらのゆがんだ顔も
丸見えさ
鏡の中にいつかの
親父がいる

パンチ パンチドラッカー
おれは
いかれてるらしぜ
やりたいようにやらせてくれ
ヘイヘイヘイ
ヘイドクター

一発も殴られないで
倒そうなんて
うまい話しは
ころがっちゃいねえさ
ここでここで

逃げりゃこがれ
とどまりゃいらついでるぜ
どっちにころんでも
大差なんてありゃしない

つべこべいわずに
リングにむかえよ
箱番は
聞きあきたぜ
能書きも
聞きあきたぜ
能書きは
聞きあきたぜ

負け犬なんかには
なりたかないだろベイビー
だけど勝たなきゃならぬ
ものはない

つべこべいわずに
リングにむかえよベイビー

パンチドラッカー
パンチドラッカー
パンチドラッカー
パンチドラッカー
おれは
ちょっといかれてるらしいぜ
やりたいようにやらせてくれ
ヘイヘイヘイ
ヘイドクター
やりたいようにやらせてくれ
ヘイヘイヘイ
ヘイドクター

1993.7.19 高円寺 尾根裏正



1993.8.13 新宿駅東口路上 このときは3曲で警察官が来て、ライブはそこで気を取り直して

スロウ・アンド・スロウ

長い長い道が見える
きついきつい旅がある
スロウ・アンド・スロウ
スロウ・アンド・スロウ

じりじりじりじり俺を焼く
だらりだらり汗が落ちる
スロウ・アンド・スロウ
スロウ・アンド・スロウ

すべてをゆるせるときがある

じりじりじりじり俺を焼く
ふり返れば俺の影が笑ってる
スロウ・アンド・スロウ
スロウ・アンド・スロウ

すべてをゆるせるときがある

さあベイビーさあ歩き出せ
さあベイビーさあ歩き出せ
さあベイビーさあ歩き出せ

おまえがころんでも
おいらは行くぜ

さあベイビーさあ歩き出せ
さあベイビーさあ歩き出せ

西日の差す丘の上
俺の墓場がある

さあベイビー歩き出せ
さあベイビー

どこまで行くの
さあね行るところまで

ベイビーさあ歩き出せ



スタジオがとれなくて、かわりに原宿の歩行者天国で練習をすることになったとのこと。他人にまかせず自分で練習ということなので他のバンドがやっているところからだいぶ離れた富ヶ谷寄りにあるサッカー場のわきの路上でやっているの、通りかかる人も少なく、見ている人もほとんどいない。途中、ヴォーカルの人の昔の知り合いだといふ黒人歌手との偶然の出会いがあって、「STAND BY ME」を一緒に歌うという楽しい場面(左の写真)もあった。

練習もおわりのほうになってきたとき、ヴォーカルの人が歩道橋の上で見ている人にむかって、「きこえる

か」といってモニターの向きをそっちにかえた。そして「マンガンズです」といってまた歌いはじめた。その瞬間から練習がライブになった。歌の色合いがかわって、まき人意識したのものになったせいか、モニターのせいばかりではなく、歌がよくきこえてきた。ライブはすばらしかった。陽の高いときからはじまった練習がライブでおわったときには西の空がみごとな夕焼けになっていた。やがて街灯がついて、肌寒い風が吹いているなか、機材や楽器の片づけを終えてメンバーたちが車で帰っていった。